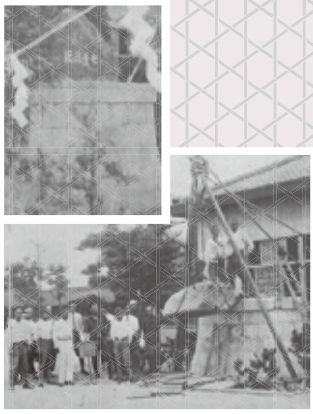
vol.251

天美小学校の楠木正成像

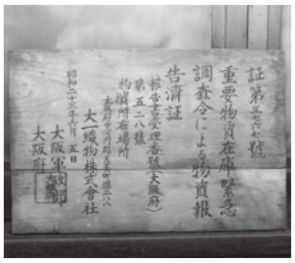
西田 孝司（松原市文化財保護審議会）



▲「七生滅敵」石の設置

▲「大楠公銅像」の供出

▲「大楠公銅像」



▲「物資報告済証」木札
（天美南4丁目・池嶋謙廣氏蔵）

「大楠公銅像」写真は、いずれも天美小学校『天美百年史』（昭和48年）より転載

天美村堀の池嶋駒吉が寄贈 供出後「七生滅敵」石を設置

松原小学校に楠木正成の銅像（大楠公馬上ノ銅像）が松原村岡の伊東榮一によって寄贈された昭和十四年（一九三九）十月（「歴史ウォーク」250）、同じように天美小学校にも大楠公馬上ノ銅像が寄贈されていました。

寄贈したのは、当時の天美村堀（現天美南）の池嶋駒吉でした。池嶋家は、戦前から織布工場を営んでおり、市域には明治末期以降、松原・天美・布忍・恵我・三宅の各村々に、多くの織布工場がありました。伊東も、伊東織布工場を経営していたのです。

駒吉の織布工場は、のち大一織物株式会社として、発展していきました。池嶋家には、昭和二十三年（一九四八）六月五日、大阪軍政部と大阪府が大一織物株式会社に証明した「重要物資在庫緊急調査令による物資報告済証」の木札が今も保管されています。戦後三年が経ったとはいえ、まだまだ物資が不足する中、池嶋家の工場に重要物資が保管され、事ある緊急の時、同社から品物を出し入れするようにしたのです。

さて、駒吉は軍国主義たけなわの昭和十四年十月、南北朝時代、南朝の忠臣・楠木正成の馬上の銅像を天美村に寄贈し、天美尋常高等小学校に設置されました。すでに、同校には前年の昭和十三年七月、天美村我堂（現天美我堂）の関本源三郎によって二宮金次郎（尊徳）像が寄贈されていました（「歴史ウォーク」204）。貧しくとも学問に励んだ金次郎像と共に、当時の挙国一致・尽忠報国・堅忍持久を目標とする国民精神総動員運動にあわせて、献金や献品などが奨励されたことを受けて、大楠公像も建立されたのでした。

しかし、昭和十八年（一九四三）六月、アジア太平洋戦争の物資不足のため、銅像は軍需品として供出され、今では現存していません。ただ、天美小学校の創立一〇〇周年の記念として発行された『天美百年史』（昭和四八年一二月）に、この頃の貴重な写真が掲載されています。

同誌の「大楠公像建立」の項には、校舎をバックに馬上にまたがる楠木正成像が見られます。昭和十四年十月一日、当時の天美村村長の北田百蔵が駒吉に贈った感謝状も紹介されています。北田はもともと天美尋常高等小学校に大正十年（一九二一）に奉職し、のち十二代校長として昭和八年（一九三三）まで勤めた教育者でした。

感謝状は「今般貴殿日本精神鼓吹強調ノ目的ヲ以テ本村ニ対シ大楠公ノ銅像 竝 台石建設工事（価格弐阡圓）御寄贈被成下候段誠ニ時局柄有意義ナル美挙ト存ジ感謝感激貴下篤志ニ対シ茲ニ萬腔ノ敬意ト深甚ナル謝意ヲ表ス」と記されています。

建立から三年半後の昭和十八年六月、銅像は供出されました。三輪車に乗せられた像を楠木氏の「菊水紋」と「非理法権天」のノボリを掲げ、前には国民学校の子どもたちや軍服姿の人々が先導しています。後ろには背広姿の人々も従っています。

まもなく、銅像が無くなった台石の上に、正成ゆかりの金剛山（千早赤阪村）から切り出された巨石が運ばれ、「七生滅敵」と刻み、台石の上に据えられたのでした。正成が述べたとされる「七たび生まれ変わっても敵を滅ぼす」の意で、松原小学校の大楠公像台石に刻まれた「七生報国」と相通じるものです。今回、この機会に台石や「七生滅敵」石が小学校周辺に遺存していないかと探しましたが、見つけることができませんでした。

戦後七十余年を経た今日、正成の精神の根幹となった「国・親・衆生・三宝」の四恩の教えが再評価されつつあります。とくに、河内地方は楠公史跡が至る所に残っています。本年四月、正成が少年時代、学問にいそしんだ観心寺のある河内長野市が中心となって、近畿の二五市町村が「楠公さん」NHK大河ドラマ誘致協議会を設立し、本市も参加しています。

戦前、多くの正成像が建立されていましたが、戦後、表に出ることが少なくなった正成に再び、脚光が浴びようとしています。